シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について（7）
—デューイのシカゴ大学辞職の経緯について—

小　柳　正　司＊

（2008年10月30日　受理）

Some Inspections of the Correspondence of John Dewey during His Chicago Years (7)
— Concerning Dewey's Resignation from the University of Chicago —

KOYANAGI Masashi

Abstract

In June 1904, John Dewey left Chicago. During his ten years in Chicago, he had become famous for his instrumentalism in logics, and had formed a group of young scholars that William James called "the Chicago school" of pragmatism. He had become known world-wide for his laboratory school and his experimental theory of education. Why his farewell from Chicago?

The purpose of this paper is to probe Dewey's deep reasons for his resignation from the University of Chicago.

There were two legends about Dewey's resignation: one attributed the cause to William Rainey Harper as the first President of the University of Chicago, who took the side of the faculty of the School of Education in the antagonism between them and Dewey as the Director of the School; the other blamed Dewey's wife Alice, whom President Harper discharged as principal of the elementary school of the School of Education because she was not respected by the teachers, and consequently she induced Dewey to resign from the University.

However, when we examine the Dewey's correspondence, we find some other hidden reasons for his resignation from the University of Chicago. First, Dewey had thought about resignation two or three years before his final decision, just when Harper planned to merge Dewey's laboratory school into the practice school of the School of Education. Therefore, it is supposed that the most powerful reason for Dewey's resignation from the Chicago was not being allowed to continue the educational experiments of his laboratory school without obstruction. In fact, Dewey confessed to James McKeen Cattell, who invited Dewey to the professorship of the Columbia University, that he was angry with Harper's lack of support for

＊　鹿児島大学教育学部　教授

the laboratory school.

Secondly, Dewey wished to get an administrative position at any university, while he negotiated with President Butler of Columbia about his transference from Chicago to New York. What does that mean? Dewey was probably looking for more academic freedom in university administrations, since he regarded Harper's Chicago as prefering financial matters to academic ones. Dewey suggested Cattell that the University of Illinois was looking for a president.

Thirdly, before Dewey submitted his resignation to Harper, he visited Columbia as a lecturer of philosophy and he was very pleased with the university. It was Cattell whom Dewey informed first of all of his decision to resign from Chicago, and at the same time he asked Cattell to send any information about job. Cattell immediately asked Dewey whether he would like to come to Columbia. Perhaps, Dewey had expected in advance the Columbia to offer him a position.

Keywords : The University of Chicago, Columbia University, John Dewey

デューイ存命中の先行研究

デューイがシカゴ大学を辞職するに至った経緯については、これまでさまざまな人がさまざまな説明をおこなってきた。

年代的に最も古いものは、メイヒューとエドワーズが編集した『デューイ・スクール』（1936年）の中の説明である。それによれば、デューイが指導する実験学校とパーカーが指導してきたシカゴ学院の小学校が1903年10月の新学期から統合されることになった際、デューイの実験学校の教員と管理職はそのまま統合後の附属小学校のスタッフとなり無期限に在職するとの理解をデューイはもっていた。ところが、ハーパー学長は「附属小学校の管理職の一部は第1年目の終了時に解雇される」という約束をシカゴ学院理事会に与えていて、そのことをデューイは1904年初めになってはじめて聞かされ、この措置に到底納得できなかったため、デューイはまず教育学部長を辞任し、それからシカゴ大学教授職も辞したというのである[1]。ここで「附属小学校の管理職の一部」と言われているのは、1901年10月から実験学校の校長を務め、その後やっかいな経緯を経て1903年10月から統合後の附属小学校長になったデューイ夫人であると推測される[2]。そうだとすればデューイの辞職の原因は、デューイ（およびデューイ夫人本人）のまったくあず

1 Katherine Camp Mayhew and Anna Camp Edwards, *The Dewey School: The Laboratory School of the University of Chicago 1896-1903* (New York: D. Appleton-Century Company, 1936), pp. 14, 17.

2 デューイ夫人が附属小学校長に就任するに際しては、デューイと附属小学校の教員を含む教育学部教員団との間で抜き差しならない対立が生じた。この対立の経緯については、小柳正司「シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について（6）――シカゴ大学教育学部の改組をめぐるデューイと教員団との対立について：1903年～1904年――」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第59巻、199-200頁、204-205頁、208-209頁、211-213頁、216-220頁、において詳細に扱った。

かり知らないところでデューイ夫人の校長職を 1903-04 年度限りとしたハーパー学長の一種の背信行為にあったということになる。

デューイの次女ジェーン（Jane M. Dewey）が 1939 年に発表した「ジョン・デューイの伝記」の中のデューイ辞職の経緯についての説明はもう少し詳細である。それによれば、ハーパー学長は当初からデューイの実験学校をパーカーの小学校と統合することを考えていて、実験学校の存続を望むデューイとの間で実験学校の処遇をめぐって摩擦が増大していた。ところがパーカーの死去により二つの小学校がデューイの管理下に統合されることになったが、学長は「資金のない学校［実験学校］に非常に冷淡ないし敵対的であったので、デューイは 1904 年に辞職した。」[3] ジェーンはこのように説明している。デューイの実験学校とパーカーの小学校は同じシカゴ大学に属する二つの小学校として一種のライバル関係にあり、ハーパー学長は資金難にあえぐ実験学校の存続には否定的であったが、両小学校の合併に際しても「資金のない学校」つまりデューイの実験学校に対しては「冷淡ないし敵対的」な態度をとったので、デューイは辞職したというわけである。

マックス・イーストマン（Max Eastman）が 1941 年に書いたデューイの伝記では、デューイのシカゴ大学辞職の経緯はさらに詳細に説明されている。それによれば、デューイのシカゴ大学辞職は長い間その真相が伏せられてきた「悲しい物語」である。そして、「デューイ夫人は彼［デューイ］にその時点で真相を公言するように望んだが、しかし彼は自分の無念さを飲み込むことにした。そのおかげで、ほかの人はみな今日まで 35 年間、品よく体裁を保つことができた」と書いている[4]。イーストマンによれば、事の発端はブレイン夫人が 100 万ドルの寄付をパーカーに与えてシカゴ学院を設立したのち、まもなくパーカーが健康を害したので、夫人はパーカーの同意のもとに寄付金をシカゴ大学に移すことにし、ハーパー学長にデューイの実験学校とシカゴ学院の小学校との合併を提案したことにさかのぼる。そのときデューイは合併の必要性を認めず、実験学校の父母たちの努力によってかろうじて 1 年間合併は避けられた。しかし、ハーパー学長は大学のために 100 万ドルを望み、「翌年デューイが都合よく東部に出かけて留守の間に、学長は夫人との交渉を再開した。そして、デューイが戻ってきたとき合併は既に決まっていた。」学長はデューイに最後の合併交渉に立ち会うよう求めたが、デューイは次のようにそっけなく拒否した。「貴兄が私の不在中に事を進めて決めたことなのですから、貴兄が最後まで交渉を仕上げればよろしいでしょう。私は貴兄が条件を設定したあとで協力するかどうか決めさせてもらいます。」これに対してハーパー学長は「貴兄の強情さが大学に 100 万ドルの損害を与えたと理事会に報告しなければならないとしたら、困ったことだ」と答えたという。デューイはやむなく合併に同意する条件として、実験学校の校長であるデューイ夫人を含む実験学校の教員の雇用継続を

3　Jane M. Dewey, "Biography of John Dewey," in *The Philosophy of John Dewey*, ed. by Paul Arthur Schilp (New York: Tudor Publishing Company, 1939), pp. 33-34.

4　Eastman, "John Dewey," *The Atlantic Monthly*, no. 168, 1941, p. 678.

求めた。つまり、合併後も実験学校の教育実験はそのまま継続することを求めたのである。学長はこれを受け入れたが、ブレイン夫人とシカゴ学院教員団側には実験学校の教員の雇用は最初の一年だけであり、校長のデューイ夫人は合併後に辞職すると伝えた。こうしたいわば二枚舌を使うことによって窮地に陥ったハーパー学長は翌年「再びデューイが東部に出かけて不在になるのを待って」、デューイ夫人の辞職はデューイも同意していることだと告げ、夫人はやむなく辞職を受け入れた。これにはさすがのデューイも憤慨した。そして、デューイ夫人抜きには実験学校の教育実験の継続は不可能であり、また遅かれ早かれ実験学校の教員たちの解雇も避けられないと判断して、デューイはまず教育学部長職を辞することにし、それをハーパー学長が受け入れたため、さらにシカゴ大学教授職も辞することにした。イーストマンは、デューイのシカゴ大学辞職という「悲しい物語」の真相を以上のように説明している[5]。

デューイのシカゴ大学辞職に関する以上の三者の説明は、いずれもデューイ存命中に書かれたものである。デューイ自身はイーストマンが書いているように、事の真相が公になることを望まなかったのであろう。そのためメイヒュー＝エドワーズの本とジェーンの伝記の説明は、イーストマンの説明に比べると歯切れが悪い。それにしても、イーストマンの説明からわかるように、デューイのシカゴ大学辞職の直接の引き金はどうやらデューイ夫人の校長職の扱いをめぐるハーパー学長の不誠実な態度にあったようである。だがそれはあくまでも引き金であって、背景には、デューイ夫人が校長職を退けば実験学校の教員の辞職も避けられず、そうなれば実験学校は事実上消滅してしまうというデューイの判断があり、さらにはハーパー学長（およびシカゴ大学理事会）が財政難を理由に一貫して実験学校の存続に冷淡な態度をとってきたことへの失望があったようである。

しかし、以上はあくまでもデューイおよびデューイ夫人と実験学校の側から見た説明であろう。ハーパー学長あるいはブレイン夫人とシカゴ学院教員団の側から見れば、事態は違って見えるはずである。ハーパー学長がデューイ夫人の校長職をめぐってデューイ側とシカゴ学院側の双方に都合よく二枚舌を用いたことは確かであるが、ハーパー学長にしてみれば、デューイ夫人は管理職者としては性格的にかなり問題のある人物で、そのことはデューイを除く周囲のだれもが認めていた（ちなみにデューイが絶大な信頼を寄せていたヤング夫人さえも認めていた）ことであり、そのためデューイ夫人の校長職就任はシカゴ学院教員団から完全に拒否されていたのであるが、さりとてデューイ夫人を合併後の校長にしたいとするデューイの強い要求を却下すれば、デューイはその時点で実験学校の存続を図るために教育学部長職を投げ出したであろうし、そうなれば両小学校の統合自体が白紙に戻ってしまったであろうから、ハーパー学長としては苦肉の策として一旦はシカゴ学院側にデューイ夫人の校長職を受け入れてもらって両小学校の合併を実現し、適当な時期が来たところでデューイ夫人には退いてもらおうと考えたのもやむをえないといえば

5　Ibid., pp. 678-680.

やむをえない措置であった。しかし、それがデューイとデューイ夫人にとっては彼らに対する最悪の背信行為となったことは間違いない。

また、デューイは実験学校の存続を強く望んでいて、両小学校合併後もデューイ夫人の指導のもとに実験学校の教員たちとともに実験学校の教育実験を継続させようとしたが、そのこと自体も、合併相手のシカゴ学院教員団から見れば合併後の附属小学校は「デューイ夫妻の学校」になってしまうという危惧を呼び起こすものだった。

さらに、ハーパー学長が実験学校の存続に冷淡な態度をとってきたことについても、少なくともハーパー学長個人は実験学校の存在意義をある程度は理解していたと思われる形跡がある。しかしいくら個人として理解をもっていても、大学理事会がデューイの始めた教育実験の意義をほとんど理解しないまま、もっぱら財政上の理由から二つの小学校の統合を求める中で、学長としての立場ではそうした理事会の意向を無視するわけにはいかなかったのも事実であろう。

デューイ没後の先行研究

デューイが没してさほど間のない1961年にロバート・マッコール（Robert L. McCaul）は、デューイがシカゴを去った理由についてアメリカ教育界には二つの伝説があるとして、その真偽のほどをデューイや関係者の書簡を用いて詳細に検討している[6]。書簡を用いたデューイ研究の嚆矢と言えよう。その二つの伝説とは、デューイがシカゴ大学を辞職するに至った原因をもっぱらシカゴ大学のハーパー学長に帰すものと、他方、当時シカゴ大学附属小学校の校長職にあったデューイ夫人に帰すものである。すなわち、一方の説によれば、ハーパー学長はデューイとシカゴ学院の教員団との対立の中で教員団に好意的な采配をおこなったため、デューイはこれを自分に対する背信行為と見なして辞職したというものであり、他方の説によれば、デューイ夫人は校長としてシカゴ学院の教員団とうまく関係をとることができず、ハーパー学長から校長職辞任を求められたため、妻思いのデューイは夫人とともに辞職を決意したというものである。

マッコールの研究は、シカゴ大学に保管されていた一次資料を用いて、デューイの辞職に至った経過を、デューイやハーパー学長をはじめとする当事者たちの直接の記録や言葉によって明らかにしている。特に、マッコールの研究で注目される点は、ハーパー学長がデューイの実験学校に対して「冷淡ないしは否定的態度」を取ったことがデューイ辞職の原因とする上述のジェーン・デューイの説明を修正していることである。マッコールによれば、ハーパー学長は個人的には当初からデューイの実験学校に多大な関心をもっていて、実験学校に激励と支持を与えていたことをいくつかの資料によって明らかにしている。それにもかかわらず、彼は大学の学長として理事会から実験学校の赤字解消を強く求められていた。そのためにハーパー学長はデューイに対して実験学校の経営に厳しい注文をつけなければならず、両者の間にしばしば意見の対立を生じさせ

6　Robert L. McCaul, "Dewey and the University of Chicago: Part I," *School and Society*, March 25, 1961, p. 152.

ていた。だが、実験学校の存続をめぐって両者の対立が決定的になったのは、1901年3月にパーカーのシカゴ学院がブレイン夫人の100万ドルの寄付金を使ってシカゴ大学のキャンパスに隣接する土地にシカゴ大学教育学部として建設されることが決まって以降、ハーパー学長がデューイの実験学校を教育学部の附属小学校（つまりはパーカーのシカゴ学院の小学校）に統合しようとしたことによる。世間一般では二つの小学校はともに同じ教育革新をめざす同じ種類の学校と見なされていたので、ハーパー学長は両校を統合すれば長年の実験学校の赤字問題は容易にかたづくと考えたわけである。

このようにマッコールは、実験学校に対するハーパー学長の「冷淡ないしは否定的態度」についてハーパー学長側から見た事情説明を加えることで、デューイ辞職の経緯について多少なりとも客観的な説明を試みている。そして、実験学校の存続をめぐるデューイとハーパー学長との対立は、要するに両者の大学内での公的な立場の違いによるものであることを明らかにしている[7]。もうひとつマッコールの研究で注目すべき点は、シカゴ学院の小学校と実験学校の統合について、当初統合に反対していたデューイが、1903年になって自ら両校の統合を提案するに至ったことを資料にもとづいて明らかにしたことである。マッコールはその背景として、デューイには「遅かれ早かれ実験学校は教育学部の附属小学校に統合されることになるだろうから、教育学部長として自分がその統合を主導することによって、実験学校の教師陣と考え方を守ろう」という考えがあったのではないかと推測している[8]。上述のイーストマンの説明では、ハーパー学長は両小学校の統合をいわば強引に推し進めたような印象を与えているが、一次資料を使ったマッコールの研究により、それは完全に否定されている。そして、デューイによる両小学校の統合計画は、今度はシカゴ学院の教師陣から、特にデューイ夫人が統合後の校長になることについて強い反対が出て、結局ハーパー学長の妥協案によってデューイ夫人の校長職は1年限りという約束がシカゴ学院側に与えられて統合が実現したのだが、この約束についてハーパー学長はデューイ（およびデューイ夫人）との間ではっきりと確認をおこなわず、そのため翌年になってデューイ夫人の辞職とともにデューイは教育学部長を辞職し、さらにシカゴ大学教授職も辞したのである。

デューイのシカゴ大学辞職の経緯

上述のマッコールの研究により、デューイがシカゴ大学を辞職するに至った経緯についてはかなり詳細な事情が明らかになった。デューイのシカゴ大学辞職の経緯を大まかにたどれば次のようにまとめられるだろう。

①1901年にパーカーのシカゴ学院がブレイン夫人の100万ドルの寄付とともにシカゴ大学教育学部としてシカゴ大学に編入された。これ以降、シカゴ学院の小学校とデューイの実験学

7　Ibid., p. 152.

8　Robert L. McCaul, "Dewey and the University of Chicago: Part Ⅱ," *School and Society*, April 8, 1961, p. 179.

校の統合を求める大学経営陣の前に実験学校の存続が次第に困難な状況となった。しかし、この時点では実験学校の経費の赤字分を実験学校の父母会が自主的に負担することを条件に、実験学校の存続はかろうじて大学理事会から認められることになった。

② 1902年にデューイがパーカーの後継として教育学部長に就任した。それにともない、実験学校は名目上、教育学部附属小学校としてシカゴ学院の小学校と統合されたが、実際上は校舎も教員団ももとのまま実験学校として存続していた。父母会が実験学校の経費の赤字分を負担することもそのままである。なお、この年からデューイの要請でデューイ夫人が実験学校の校長に就任した。

③ 1903年に教育学部の校舎であるブレイン・ホールが完成し、実験学校とシカゴ学院の小学校は同じ建物に入り、一つの小学校として統合された。校長にはデューイの要請で実験学校の校長であったデューイ夫人が就任することになったが、シカゴ学院の教員団はこれに激しく反対した。

④ハーパー学長は妥協案として、デューイ夫人の校長職は1年限りとする約束をシカゴ学院側に与えたが、このことについて彼はデューイおよびデューイ夫人に明確な説明をおこなわなかった。

⑤ 1904年になってハーパー学長はデューイ夫人の校長職は1年限りであることをデューイ夫人に通告し、このことはデューイ自身も承知していることだと述べた。デューイはハーパー学長の不誠実なやり方に抗議する形でシカゴ大学を去る決意をした。

以上のように見てくると、シカゴ大学時代のデューイにとって実験学校がいかに特別な存在であったかがわかる。だが、実験学校の存続を思い通りに実現することができなかったことだけがデューイ辞職の原因だったのだろうか。事はそれほど単純なものではなかったように思われる。以下ではデューイ辞職の経緯について、マッコールと同じく一次資料によりながら、いま少し広い文脈の中でデューイ辞職の経緯を掘り下げてみることにしたい。

シカゴ大学教育学部の改組とデューイの辞職

実験学校は文字通りデューイ夫妻の学校であった。実験学校の発足にあたり大学当局は1000ドルの準備資金を出しただけであり、その後は実験学校でアシスタントを務める大学院生の俸給を授業料免除という形で補助する以外、大学当局は校舎の建築はおろか、実験学校の運営に一切の資金を支出しなかった。教員の給与を含む実験学校のほとんどの経費は、授業料収入と実験学校の父母や支援者による寄付によってまかなわれた。デューイは自ら寄付の依頼をするために講演をおこなったり、『学校と社会』の印税を実験学校の経費に充てたりした。デューイ夫人は無給で実験学校の運営に協力した。それにもかかわらず、大学当局は毎年度、実験学校の収支決算報告をデューイに求め、赤字の解消がなされなければ閉校も辞さないという姿勢を示した。もちろん、経費を大学に依存しない分、実験学校の教育経営は不当な干渉を受けないですんだ面もあ

ろう。しかし、大学当局の実験学校に対するあまりの無理解と冷淡な態度に対してデューイは相当に閉口していたことも事実である。

デューイは、実験学校の成果が国内外で高く評価されていること、そしてそのことによってアメリカ教育界の中でシカゴ大学の位置を高めることに大いに貢献したことにかなりの自信をもっていた。さらに彼は、パーカーの後任として教育学部長に就任して以降、教育学部をコロンビア大学ティーチャーズカレッジに匹敵するプロフェショナル・スクールとして再編し、パーカーのシカゴ学院がおこなおうとした師範学校型の範例教示による教員養成ではなく、教育の実験的研究を中心にすえた大学レベルの教員養成をおこなおうとした。いわば教員養成の革新をめざしたのである[9]。しかし、こうしたデューイの教育学部再編と教員養成の革新の構想は、クック郡師範学校以来パーカーの薫陶を受けてきたシカゴ学院教員団にとってみれば、自分たちの立場とこれまでの実績を否定するものに他ならなかった。こうしてデューイとシカゴ学院教員団との間には根深い対立と相互不信が生まれた。教育学部の新校舎であるブレイン・ホールの竣工とともにデューイの実験学校もそこに移転し、シカゴ学院の小学校とともに文字通り一つの大学附属小学校に統合されることになった。だが、実態は一つの小学校に二つの教員団が同居する状態が続いた。新生附属小学校の校長にデューイ夫人が就任することは、デューイとシカゴ学院教員団との対立の中で、いわば両者の対立を象徴する出来事となってしまった。これはデューイ夫人本人にとって、またデューイにとって、さらにはシカゴ学院教員団にとって不幸なことであった。ブレイン・ホール竣工後、シカゴ大学教育学部と附属小学校はまさにそうした状態で1903-04年度をむかえたのである。

デューイにしてみれば、実験学校がシカゴ学院の小学校との統合によって名実ともにその中に解消してしまうことはなんとしても避けたいところであった。もちろんそこには実験学校に対するデューイ個人の思い入れがあったことは確かであろう。しかし、それとともに教育学部を専門性の高い教員養成のプロフェショナル・スクールへと再編するうえで、実験学校を教育学部再編の核にすえることはぜひとも必要なことであった。

ブレイン・ホールには、初等教員養成をおこなうシカゴ学院、その実習校である附属小学校とデューイの実験学校、さらにはシカゴ大学への進学準備教育をおこなうサウスサイド・アカデミーと工業技術教育をおこなうシカゴ手工学校が同時に移転・入居した。デューイは学部長として、これら二つの小学校と二つの中等学校を一つの初等・中等一貫校に再編し、この初等・中等一貫校をモデル校兼実習校にして大学レベルの初等・中等教員養成をおこなうことを構想していた。さらには、大学院課程において教育専門職養成をおこない、Ed.D（教育専門職博士号）を授与することまで考えていた。こうした構想を実現するうえで、デューイは自らが築き上げてきた実験

9　小柳正司「シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡に就いて（6）――シカゴ大学教育学部の改組をめぐるデューイと教員団との対立について：1903年～1904年――」『鹿児島大学教育学部研究紀要・教育科学編』第59巻、2008年3月、192-193頁、参照。

学校の成果を中等教育のレベルにまで拡大したいと考えていたのであり、そのためには初等教員養成の域を出ないシカゴ学院の教員団に統合後の附属小学校の主導権を渡すわけにはいかなかったのである。

だが、シカゴ学院教員団との対立が深まる中で、自らの教育学部再編の構想は思うように進展せず、ほとんど手詰まり状態に陥ったことに加えて、教育学部再編を進めるうえで頼みのハーパー学長の後ろ盾も（デューイ夫人の校長職の扱いをめぐる学長の対応に示されているように）まったく期待できないことが判明して、ついにデューイはシカゴ大学に見切りをつけたのである。

デューイ夫人の校長職問題

1904年2月29日付で、ハーパー学長はデューイ宛にデューイ夫人の校長職は1903-04年度限りで終了することを通知した。ハーパー学長はこの直後に胃の手術を受けるため入院することになっていた。デューイは集中講義をおこなうため3月13日からニューヨークに出かける予定になっていた[10]。ハーパー学長の手紙の全文を訳出する。

拝啓　デューイ様

入院する前にお会いしたいと先週お伝えしたときには、入院は月曜日の午後か夜になると思っていました。今日（日曜日）予定が変わって、月曜日の午前に入院することになりました。それで貴殿にお会いすることができなくなりました。しかし、3月6日か7日以降になれば病院に来ていただける人たちにお会いする時間はあるだろうと思っています。これで貴殿が出かけるまでの1週間のうちに会見をもつことができるでしょう。

次年度の予算と人事の件で二、三の重要な問題があります。そのうちの一つは既に貴殿から提起されました。もう一つの問題は校長職のことです。覚えておられるでしょうが、附属小学校の現在の校長の任命は委員会と理事会の意向に反しているというのが理事会のはっきりとした理解です。もちろん、校長ご本人に問題があるというのではなく、これまで貴殿にも2、3回お話ししたことがある原則にもとづいたものです。この原則は変えがたいものです。貴殿とデューイ夫人にとって今年度の措置が昨春のごたごたの中で出されたすべての要望を満たすものとなることを私は切に願っています。私が貴殿に対して個人的にも公的にもどんなに大きな愛着を感じているかはおわかりでしょう。私は貴殿が教育学部を構築するにあたってあらゆる点で貴殿に協力する用意があります。しかし、私は2年前と同様に今日でも、小学校長は当大学の教授の妻を大学の管理職ないししかるべき役職に採用することに相当するものと考えています。当大学ばかりでなく他の諸大学の過去の例を見ても、これは完全に納得のいくものです。

10　Robert L. McCaul, "Dewey and the University of Chicago: Part Ⅲ," *School and Society*, April 22, 1961, p. 203. デューイが3月3日付でニューヨークのウッドブリッジ（コロンビア大学教授）に出した手紙では3月10日から30日までニューヨークに滞在する予定と書いている。John Dewey to Frederick J. E. Woodbridge, March 3, 1904, NNC, *Journal of Philosophy* Papers (00917). しかし、デューイが3月11日付でジャックマンに出した手紙はシカゴで出されており、デューイが3月14日付でフランク・マニー宛に出した手紙はニューヨークで出されているので、デューイはやはり3月13日にシカゴからニューヨークに出発したものと思われる。

3月13日に貴殿が出発する前に貴殿と状況全体をあらいざらい検討する機会をもちたいと思います。

敬具[11]

もってまわった言い回しが多いので少々わかりにくいところがある。要するに、デューイ夫人が校長職にあることは、夫婦で大学の管理職に就くことはできないとする「原則」に抵触するので、デューイ夫人の校長職を解任することについてデューイに直接会って話をしたいと言っているのである。手紙の文面ではデューイ夫人を校長職から解任したいと直接的には述べられていない。このことをもってハーパー学長のあいまいな態度、はっきりとものを言わない優柔不断さなどを指摘する向きもある[12]。しかし、この手紙を読んだデューイ自身はハーパー学長がデューイ夫人の校長職解任を求めていることを間違いなく理解できたはずである。なぜなら、ハーパー学長は理事会がデューイ夫人の校長職に「原則」を理由に反対していることをこの手紙以前にデューイに一度ならず話をしており、さらには2年前にデューイがハーパー学長の承諾を得ないままデューイ夫人を実験学校の校長に任命するという失態を演じて学長に謝罪し事後承諾を得たときにも[13]、この「原則」についてデューイに話をしているからである。にもかかわらず、個人的にも公的にもデューイに「大きな愛着」を感じているハーパー学長は2年前も、また昨春の「ごたごた」、つまり新しい附属小学校の校長職にデューイ夫人が就くことをめぐってデューイとシカゴ学院教員団との間で鋭い対立が生じた際にも、教育学部の構築をめざすデューイの努力に全面協力するため、あえて「原則」にこだわらずデューイ夫人の校長職就任を認めた。ここにこそハーパー学長の優柔不断さ、あいまいな態度があったと指摘することはできるだろう。しかし、本格的なプロフェショナル・スクールに向けて教育学部の拡充・発展を指導できる人物はデューイをおいて他にいないという判断がハーパー学長にはあったのである。多少の譲歩をしてでもデューイを教育学部長に引きとめておく必要が彼にはあったのである。ハーパー学長はこうした自分の立場をわかってくれるようにとデューイに切々と訴えているのである。手紙の文面がもって回った言い方になっているのもそのためであろう。けっしてビジネスライクには書けなかったはずである。

ところがデューイは、ハーパー学長と会見をもつことなくニューヨークに出発してしまった。ニューヨーク滞在中彼は、コロンビア大学で「知識の問題」と題する6回の講義と、ブルックリン学院で「道徳教育」と題する3回の講義をおこなった[14]。そして、3月30日か31日にニュー

11　William Rainey Harper to John Dewey, February 29, 1904, ICU, Board of Trustees, Correspondence of the Secretary, 1890-1913, 3/7 (00925).

12　McCaul, "Dewey and the University of Chicago: Part III," pp. 203, 206.

13　この出来事については、小柳正司「シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡に就いて（4）——シカゴ学院の併合からデューイの教育学部長就任まで：1901年～1902年——」『鹿児島大学教育学部研究紀要・教育科学編』第54巻、2003年3月、164-165頁、参照。

14　McCaul, op. cit., p. 203.

ヨークを発ってシカゴに戻っている[15]。急遽予定を切り上げての帰還であった。おそらく3月27日におこなわれたハーパー学長とデューイ夫人の会見の内容を知らせるデューイ夫人の手紙が届いたためであろう[16]。

この会見でハーパー学長は、昨年デューイ夫人を附属小学校長に任命した際、デューイとの間で、デューイ夫人は「いつかの時点で校長を辞めることを承知しているが、彼女はおそらく任命から一年以内に辞めるだろう」という理解がなされていたとデューイ夫人に告げた[17]。ここでハーパー学長がはっきりとデューイ夫人の校長職は「任命から一年以内」、つまり1903-04年度限りで終了することになっていると述べたことに、デューイ夫人は驚いたことであろう。夫婦で大学の管理職に就くことはできないという「原則」があること、附属小学校長職もこの「原則」があてはまること、こうしたことをデューイがニューヨークに出発する前にハーパー学長がデューイに通告してきていることをデューイ夫人はデューイから聞いて知っていたはずである。が、まさかそれが1903-04年度限りのものだということは寝耳に水であったに違いない。しかも、それは夫のデューイも1年前から承知していたことだなどと言われては、デューイ夫人の立場はなかったであろう。夫人の知らせにデューイが急遽出張先のニューヨークから帰還したのももっともである。

デューイ夫人の校長職は暫定的なものであり、おそらくは1年限りになるという確認が1年前デューイとハーパー学長との間で取り交わされていたという話はまったくの事実無根であった。そうした確認が1年前あったとすれば、それはハーパー学長とシカゴ学院のブレイン夫人（および教員団）との間での確認であって、デューイとの間でそうした確認を取り交わすことは、ブレイン夫人が強く要望したにもかかわらず、学長はうやむやにしていた[18]。先に引用した1904年2月29日付ハーパー学長のデューイ宛の手紙からすれば、ハーパー学長は1年前デューイ夫人を附属小学校長に任命する際に、夫婦で大学の管理職に就くことはできないという「原則」があることと、附属小学校長職もこの「原則」があてはまることまではデューイにそれとなく説明したのであろう。しかし、彼はデューイ夫人の校長職が暫定的なものになることまでははっきりと説明しなかったのであろうし、いわんやそれが1年限りのものとなることなどまったく触れなかっ

15　John Dewey to Frank A. Manny, March 26, 1904, MiU-H, Manny Papers (00944). この手紙でデューイは火曜か水曜にシカゴに戻らなければならなくなったと書いている。1904年3月26日は金曜日なので、火曜か水曜というのは3月30日か31日ということになる。

16　Ibid. マニー宛のこの手紙でデューイは「家から知らせが来た。病気のことではなく仕事のことだ。講義が終わったらすぐにここを去らなければならない」と書いている。

17　これは、ハーパー学長が1904年4月30日付でデューイ夫人宛に送った手紙の中に記されている。William Rainey Harper to Alice Chipman Dewey, April 30, 1904, ICU, Board of Trustees, Correspondence of Secretary, 1890-1913, 3/7.

18　小柳正司「シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡に就いて（6）——シカゴ大学教育学部の改組をめぐるデューイと教員団との対立について：1903年～1904年——」『鹿児島大学教育学部研究紀要・教育科学編』第59巻、2008年3月、218-220頁、参照。

たに違いない。そこまで踏み込めばデューイは納得せず、デューイとシカゴ学院教員団との内部対立を収めるハーパー学長の妥協策、つまりデューイ夫人の附属小学校長任命を認める代わりにデューイにはシカゴ学院教員団の一部教員の解雇を撤回させるという妥協策は流産してしまい、その時点でデューイが教育学部長職を投げ出すことは明らかだったからである。

ニューヨークから急遽戻ったデューイは、夫人と対応を十分に話し合ったことであろう。そして遂に、デューイ夫人は4月5日付でハーパー学長宛に附属小学校長を辞することを伝える手紙を出した。全文を訳す。

> 教育学部の教員団の中での私の地位についての貴殿の態度は、私の仕事が教育よりも個人的な事情にもとづいておこなわれているとするかのようなものですので、ここに私は大学附属小学校長を辞することにします。辞職は私の公式の年度終了時である1904年10月1日から発効します。
>
> このような興味深い教育実験の推進に携わることができて満足であったことをここに感謝申し上げます[19]。

デューイ夫人は、ハーパー学長が彼女の校長職を「個人的な事情」によるもの、つまり教育学部長の妻として附属小学校長を務めていると見なしていることに抗議する形で辞職を申し出ている。デューイ夫人にしてみれば、彼女の校長職は彼女の教育者としての使命と能力によるものであって、けっしてデューイの妻だからというものではないという自負がある。それは当のデューイも認めるところであった。

辞表の提出

4月5日付のデューイ夫人の辞職願に続いて、翌日の4月6日付でデューイは教育学部長職を辞することを伝える手紙をハーパー学長宛に出した。全文を訳す。

> 教育学部長職を引き受けるにあたって私が企図した仕事の管理面ないし外的側面は今や達成されました。そして、貴殿が概略を示した諸条件では教育面の発展は望めませんので、ここに私は教育学部長の辞職を申し出ます。これは1904年7月1日に発効します。
>
> この辞表を提出するにあたり、教育学部の同僚諸氏と大学理事会による心からの御支援に対して深く感謝の意を表します[20]。

デューイは、夫人の校長職問題については一言も述べていない。ただ、教育学部の改組について、その管理面つまり組織や制度の側面は今や達成されたが、教育面つまり改組後の教育学部の

19　Alice Chipman Dewey to William Rainey Harper, April 5, 1904,

20　John Dewey to William Rainey Harper, April 6, 1904,

教育活動については、ハーパー学長の示した諸条件では発展が望めないので、教育学部長を辞すると述べている。デューイが上の手紙で「教育学部長職を引き受けるにあたって私が企図した仕事」と言っているのは、パーカーから受け継いだ教育学部を初等・中等教員養成をおこなうプロフェッショナル・スクール（いわゆる Ed. School）へと改組・発展させることである。ブレイン・ホールが完成し、1903-04 年度からシカゴ学院とその附属小学校、デューイの実験学校、サウスサイド・アカデミーそしてシカゴ手工学校が一つの建物に入り、教育学部はそれまでのジュニア・カレッジ相当の２年制の初等教員養成機関から、管理面では初等・中等一貫校を併設するシニア・カレッジ相当の４年制の Ed. School へと脱皮した。しかし、教育面ではあいかわらずこれらの学校はそれぞれに教員団をもち、それぞれに従来のままのカリキュラムで教育をおこなっていたのである。しかも、デューイとシカゴ学院教員団は附属小学校の統合をめぐって激しく対立し、両者のうちのどちらかがシカゴ大学教育学部から去るという破局はハーパー学長の妥協策によりかろうじて避けられていた。そうした手詰まり状態の中で、再びデューイ夫人の校長職をめぐってトラブルが生じたのである。デューイとしてはこれ以上教育学部長職にとどまる理由はないと判断するほかはなかったであろう。

数日後の４月 11 日になり、デューイは哲学科主任教授を辞職することを知らせる手紙をハーパー学長宛に出した。この辞職届に添えられていた手紙には、辞職の理由がこう書かれていた。

> ほかのことが決着するまで同封の辞職届を出すつもりはありませんでしたが、貴殿との会見の後、私の希望について何もおっしゃっていただけないのは残念だと思いましたので、明日理事会があると貴殿からお聞きし、それなら今これをお届けして、二人の辞表を明日の理事会に提出していただくようお願いするのがよいと考えた次第です[21]。

この文面によれば、デューイは最初から教育学部長職とともにシカゴ大学教授職も辞する覚悟でいたらしいことがわかる。しかし、教授職の辞任のほうは「ほかのことが決着するまで」つまりデューイ夫人の校長職辞任と自分の教育学部長職辞任が決着するまで申し出るのを差し控えていたということらしい。ところが、４月５日付のデューイ夫人の辞表と４月６日付のデューイの辞表が出された後、ハーパー学長は両人の辞表に対してなんらのリアクションも取ろうとしないので、４月 12 日に開かれる次回理事会にシカゴ大学教授職の辞表もあわせて提出するよう求めたというわけである[22]。

４月５日付のデューイ夫人の校長職辞任と４月６日付のデューイの教育学部長職辞任の届けが

21　John Dewey to William Rainey Harper, April 11, 1904,

22　ロバート・マッコールによれば、ハーパー学長は「教育学部の利益を守るために、デューイとデューイ夫人の辞表を受理するつもりでいた。」McCaul, op. cit., pp. 203-204. そうだとすると、デューイが４月 11 日付でシカゴ大学教授職の辞表を出したのは、こうしたハーパー学長の対応を見ての行動であったということになろう。

出された後、デューイはハーパー学長がデューイの教育学部長職辞任を思いとどまらせようと、何らかの働きかけをしてくるだろうと期待していた。デューイに教育学部長職辞任を思いとどまらせるためには、当然のことながら、ハーパー学長はデューイ夫人の校長職が1903-04年度をもって終了するという当初の通告を一旦は撤回する必要があった。そして、そのうえで改めて附属小学校の校長職問題を含む今後の教育学部の体制についてデューイと真摯に話し合う必要があった。しかし、ハーパー学長はデューイとの会見でデューイ夫人の校長職が1903-04年度をもって終了するという当初の通告を撤回するどころか、デューイ夫人の校長職が暫定的なものであり、就任から1年以内にデューイ夫人は辞任するということをデューイ本人も当初から承知していたはずだという一方的な主張を繰り返した。ここにいたってデューイは、妻ともどもシカゴ大学そのものから身を引く決意をはっきりとハーパー学長に伝えたのである。

ハーパー学長による慰留

デューイがシカゴに来て10年が経過しようとしていた。今や彼は、プラグマティズムの哲学者として第一級の名声を勝ち取り[23]、また全米の教育界に絶大な影響力をもつに至っていた[24]。さすがのハーパー学長もデューイのシカゴ大学教授職辞任の申し出に対しては慰留の働きかけをおこなった。シカゴ大学がデューイを失うことは大きな痛手だったからである。彼はデューイとデューイ夫人の辞表を4月12日の理事会には提出せず、自分の手元に保留した。そして、大学内でデューイと最も親しい関係にあった哲学准教授のミード（George Herbert Mead）と心理学准教授のエンジェル（James Rowland Angell）に意見を求めた。

ミードは、デューイ夫人がデューイの研究にとって不可欠な役割を果たしていることを強調した。エンジェルは「これまで同様、貴兄はデューイ夫人をできることなら校長にしておきたいと強くその必要を感じておられると思います」と述べたうえで、ハーパー学長は夫人に謝罪し、デューイが自ら選んだ校長（デューイ夫人）を少なくとも3年は任用すること、そしてジャックマンを教育学部主事（Dean）からはずし、デューイが受け入れ可能な人物に取り替えることを進言した[25]。ミードとエンジェルの意見は、要するに、前年のデューイとシカゴ学院教員団との対立の中で、ハーパー学長がシカゴ学院側に配慮した妥協策で事態を収めたことに対して、むしろデューイの側に立って事態の解決を図るべきだったとする意見である。教育学部の改組・発展に向けてデューイが教育学部長としての職務を十分に遂行するためには、デューイ夫人の校長職

23　ウイリアム・ジェームズは、デューイとシカゴ大学哲学科の若手同僚が1903年に著した『論理学論集』を絶賛し、この書物をもって「シカゴ学派」の成立とまで称している。そして、イギリスのプラグマティズム哲学者のシラーをはじめ、

24　1902年に実験学校がパーカーのシカゴ学院附属小学校と統合されることが報じられた際、全米の各地の教育関係者からデューイの実験学校がアメリカの教育界に及ぼした影響力を指摘して、統合を見送るように求める声が多数寄せられた。また、デューイ自身、全米各地の教育関係機関に招かれて講義をおこなっている。

25　McCaul, op. cit., p. 204.

の継続と、ジャックマンをはじめとするシカゴ学院教員団の排除が必要であり、それができなければデューイが辞職することは避けられないというわけである。シカゴ学院教員団が温存されたままデューイ夫人が附属小学校長を辞職すれば、デューイが教育学部長として学部の改組・発展に指導力を発揮することは困難となり、それでは彼が教育学部長職を続ける意味はない。デューイが夫人とともに教育学部の仕事から手を引くことを決めた理由はそのようなものであったことが、上記のエンジェルの進言から知ることができる。そして、ハーパー学長からは特に慰留の働きかけがないことを見て、デューイはさらにシカゴ大学教授職をも辞する決意をしたのである。

ハーパー学長は、また彼自身ともっとも親しい関係にあった政治学教授で総合科学部長（Dean of the Faculties of Arts, Literature, and Sciences）のハリー・ジャドソン（Harry Pratt Judson）と社会学教授で大学院総合科学研究科長（Dean of the Graduate School of Arts and Literature）をしていたアルビオン・スモール（Albion Woodbury Small）にもデューイの辞職届をどう扱うかうべきかについて意見を求めた。両人はデューイ夫人の校長職再任に反対した。特にジャドソンは、デューイ夫人が夫君ともに教育学部の管理職に就くことは「いたずらに混乱を引き起こし、かえって両人が自由に仕事を遂行することを妨げることになる」と述べ、「デューイ夫人は役職から退くべきであり、そうしなければ摩擦が生じ、デューイ氏のより大きな仕事の成功を損ねることは必定だ」と述べた。そのうえでジャドソンは、現在の教育学部のスタッフの一部または全部を一旦解雇して、デューイの考えでスタッフを構成しなおすべきだと進言した[26]。要するに、ジャドソンは、デューイが教育学部の改組・発展を推し進めることを第一義に置き、そのためには混乱や摩擦の原因となっているデューイ夫人を辞めさせるとともに、デューイには思い通りのスタッフ構成をやらせるべきだと主張しているのである。後者の点にかぎれば、問題解決のためにはジャックマンをはじめとするシカゴ学院教員団の排除が必要だとする先のエンジェルの主張と同じである。だが、エンジェルとは違ってジャドソンはデューイ夫人の排除も必要だとしている。つまり、デューイ夫人とシカゴ学院教員団の両方を排除したうえで、デューイは改めて自らの構想に従い思い通りにスタッフ構成をおこなうべきだというのがジャドソンの考えであった。おそらくこれは第三者の判断としては的確なものであったと思われる。しかし、デューイが考えるスタッフ構成のまさに中心にデューイ夫人が位置していたとすれば、これはデューイには受け入れがたい案であったであろう。他方、デューイが夫人の校長職継続にこだわるのは、ジャドソンには不当な要求と映っていた。

ハーパー学長は1904年4月18日付でデューイに手紙を送り、「貴殿の立場から状況に光を当てた説明がこの24時間内に届きました。同時に一二の点で、貴殿は私の立場を正しく理解していないように思います」と書いている。そして、互いに相手の立場についてまだ理解が不十分

26　Ibid., p. 204.

27　William Rainey Harper to John Dewey, April 18, 1904, CIU, Board of Trustees, Correspondence of the Secretary, 1890-1913, 3/7.

なので「これまでよりも深く問題全体を検討する機会をもちたい」と述べ、翌日の理事会には辞表を提出しないと通告した[27]。デューイにシカゴ大学からの辞職をなんとか思いとどまらせたいということであろう。ハーパー学長のこの手紙の文面からすると、どうやらデューイもハーパー学長に自分の立場を説明する手紙を送っていたらしいが、両者の立場の違いはなかなか埋まらなかったようである。

ハーパー学長は4月22日にデューイと会見し、デューイ夫人の校長職継続を認めてもよいとついに最後の譲歩をおこなった。そして、1904年4月26日付のデューイ宛の手紙で、自分のこの申し出についてデューイ夫人とも既によく話し合ったことであろうから、翌日（4月27日）このことでデューイと会見したいと申し入れた。しかも、場所は学長室ではなく教育学部のデューイの部屋でと書いている[28]。学長が自分のほうから出向くというわけである。デューイをシカゴ大学に引き止めるためにハーパー学長が最大限の譲歩の姿勢を示していることがわかる。

デューイは1904年4月27日付のハーパー学長宛の手紙で、先の4月18日付のハーパー学長からの手紙と他の人々の話から、自分にはハーパー学長からきちんと説明してもらわなければならないことがまだあると判断したが、学長からはこの間いっこうに説明がないので、いつまでも辞表を保留のままにしておけば、学長ばかりか自分にも責任が及びかねないと述べ、本日（4月27日）学長と会うことにすると返事している[29]。デューイがどのような点について学長からの説明を求めているのかは不明であるが、おそらくは学長がデューイ夫人の校長職継続を認めると譲歩したことに対して、それが単にデューイをシカゴ大学に引き止めるための便宜的な譲歩なのか、それとも教育学部の改革を進めるうえでデューイ夫人が附属小学校長を続けることが不可欠だとするデューイの立場を認めたうえでの譲歩なのかを確認したいということであろう。夫婦で大学の公的な役職に就くことはできないとする原則を、ハーパー学長が今回もまた一時しのぎの便宜として引っ込めるというのであれば、本質的な問題解決にはならないというのがデューイの考えであったろう。そして、人事を含むデューイの教育学部改革構想にハーパー学長がどれだけ真剣に協力する用意があるのかもデューイにとってはぜひ確認しておきたいところであったろう。

おそらく4月27日の会見でもデューイはハーパー学長から納得のいく説明を得ることができず、辞職届を撤回しなかったのであろう。デューイ夫人の校長職継続さえ認めればデューイは辞職を思いとどまるだろうというハーパー学長の思惑は見事に外れたわけである。同日付でハーパー学長はデューイ宛に辞職届を次回理事会に諮ることを伝える手紙を送った。以下その全文を訳す。

28　William Rainey Harper to John Dewey, April 26, 1904, ICU, Board of Trustees, Correspondence of the Secretary, 1890-1913, 3/7.

29　John Dewey to William Rainey Harper, April 27, 1904, ICU, Presidents' Papers, 1889-1925, 30/26.

親愛なるデューイ氏へ

私は、教育学部長を辞職するという4月6日付の貴殿の手紙と、哲学科教授および哲学科主任を辞職するという［4月11日付の］貴殿の手紙を受け取っています。この間の貴殿との会見で申し上げましたように、私には貴殿がこうした措置を取るに際して、この件に関する事実のすべてを完全に考慮に入れたというふうにはとても思えません。当大学は、貴殿に教育学部と哲学科の両方で仕事を続けていただきたいと心から強く希望しております。私は個人的にも公的にも、長年にわたって貴殿の学科の二つの部門［哲学科と教育学科］での貴殿の仕事を支援するために私なりに最大限努力してきました。2回の会見で貴殿とともに事態を注意深く検討しましたが、私には貴殿がなぜ辞職を申し出されたのか根拠がよくわかりません。以前申し上げましたように、デューイ夫人はいずれかの時点で校長職を自ら進んで辞するけれども、それは任命から1年以内になるだろうという理解を昨年春に私は貴殿との間で取り交わしたものと思っていたのですが、貴殿がそうした理解をもっていないということを知って私はたいへん遺憾に思っています。後日貴殿がおこなった申し入れ、つまり彼女の任命を1年から3年に変更するという申し入れを理事会が受理しなかったのは、そもそも任命自体が一時的なものだという彼らの理解のなせるわざ以外の何ものでもなかったと解釈するしかありません。繰り返しますが、私としてはこうした点をご理解いただけなかったことをたいへん遺憾に思っています。

私は上述の会見で貴殿の辞表の文面に示されている立場を変えていただくよう貴殿を説得することがついにできませんでした。ですから次回の理事会に辞表を提出することにします。貴殿の辞職の受理を理事会に諮るにあたり、貴殿が設立間もない当大学においておこなった素晴らしい仕事に心より感謝申し上げるとともに、私としては貴殿と協力して多くの興味ある仕事に取り組めたことに特別な思いをもっているということを申し添えます。

敬具[30]

このハーパー学長の手紙の文面からすると、ハーパー学長は手元にデューイの辞表が届いた後2回デューイと会見している。それでも彼はデューイに辞職を思いとどませることができなかった。その最大の理由は、「デューイ夫人はいずれかの時点で校長職を自ら辞するけれども、それは任命から1年以内になるだろうという理解」をデューイがもっていなかったことにある。実際、前年春にデューイ夫人を校長に任命するに際して、ハーパー学長はこうした条件を付してシカゴ学院教員団にデューイ夫人の校長職任命をなんとか受け入れさせたという事情がある。だから、彼はおそらくこの条件については何らかの形でそれとなくデューイにも話したはずである。が、この条件についてデューイは納得しない。なぜなら、ハーパー学長はデューイが解雇を求めてい

30　William Rainey Harper to John Dewey, April 27, 1904, cited from McCaul, op. cit, p. 204. なお、マッコールによれば、ハーパー学長はこの手紙をデューイのオフィスに送ったが、もう一通同文の手紙を4月30日付でデューイの自宅にも送付している。William Rainey Harper to John Dewey, April 30, 1904, ICU, Board of Trustees, Correspondence of the Secretary, 1890-1913, 3/7.

たシカゴ学院の一部教員に3年間の雇用継続を与えるというもう一つの和解条件をシカゴ学院教員団に示していたからである。こうした板ばさみの中でハーパー学長は、シカゴ学院のブレイン夫人が和解条件を文書化してデューイとの間で確認しておくことを強く求めたにもかかわらず、あえてそれをおこなわず、デューイ夫人の校長職は1年限りという点をうやむやにしてしまったというのがどうやら真相のようである。したがってデューイとしては夫人の校長職が任命から1年以内に終了するなどということを了承した覚えはないと主張するのは当然であった。

それにしても、デューイが学長を通して理事会におこなった申し入れ、つまりデューイ夫人の校長職任命を1年から3年に変更するという申し入れがいつのことなのか不明である。もし昨年春の任命がおこなわれた時点での話ならば、デューイは夫人の任期が1年限りだということを最初から知っていたことになる。が、多分それはありえない。申し入れは、おそらくはデューイ夫人がハーパー学長から校長の任期は1年限りだと通告された1904年3月末以降のことだと思われる。そして、上のハーパー学長の手紙にあるように、理事会はそもそもデューイ夫人の任命自体が最初から一時的なものとなっていたのだからという理由で、任期の変更を認めなかった。おそらく、これでデューイはもはや交渉の余地なしと判断したものと思われる。デューイにすれば、自分がなぜこれほどまでにデューイ夫人の校長職にこだわるのかについて、理事会もハーパー学長もまったくその趣旨を理解していないと判断したのであろう。ハーパー学長は言葉ではデューイの教育学部改革に全面支援を約束しながら、実際行動ではシカゴ学院とその教員団に肩入れし、教育学部改革を妨げるような措置を取ってきた。デューイには昨年来のハーパー学長の態度はそのようなものにしか映らなかったのである。その後（4月22日）になってハーパー学長からデューイ夫人の任期を継続してもよいという譲歩が示されたけれども、それがいつもどおりのハーパー学長による一時しのぎの便宜的措置でしかないことはもはやデューイには明々白々であった。少なくとも、エンジェルがハーパー学長に進言したように、デューイ夫人の校長職継続とシカゴ学院教員団の排除が同時におこなわれるのでないかぎり、デューイは教育学部改革から手を引き、シカゴ大学からも去るとした自らの決断を変えるつもりはなかったであろう。

ハーパー学長は、1904年4月30日付でデューイとデューイ夫人のそれぞれに宛てて、それぞれから出されている辞職届を次回理事会に諮ると知らせる手紙を出している。デューイ宛の手紙は上記の1904年4月27日付の手紙と同文である。デューイ夫人宛の手紙も内容の趣旨はほぼ同じであるが、全文を訳す。

親愛なるデューイ夫人へ

先日［4月27日］のデューイ氏との会見で申しましたように、いくつかの事実に誤解があるので、説明のために貴女に直接お話しようと思っていましたが、よくよく考えて、お手紙を差し上げることにしました。

私は3月27日土曜日午前の貴女との会見で、貴女はいつかの時点で校長職を自ら進んで辞するだろうが、おそらくそれは任命から1年以内になるだろうということがデューイ氏と私との間で了解されていたと申し

上げました。私はデューイ氏から、彼がこの了解を私と共有していないことを聞かされました。このことに関して私は自分の立場をきちんと説明すべきだったと思っています。私はデューイ氏がどうして昨年春の話し合いで出された点を了解していなかったのか理解できません。この点をはっきりさせようと努力したにもかかわらず、これが私自身とともに理事会の委員会の意向でもあることを彼には理解してもらえなかったように思います。

4月5日付の貴女の辞職届を受理するよう理事会に諮るにあたって、貴女が実験学校と教育学部の小学校に関係しておこなった熱心で精力的な仕事に対して、私は心から感謝申し上げる次第です。貴女の仕事は真に献身の精神を特徴づけるものでした。

敬具[31]

ハーパー学長からのこの手紙にデューイ夫人は返事を出し、3月27日の会見についてのハーパー学長の手紙の記述は事実に反すると書いている。その上でデューイ夫人は、その会見でハーパー学長が彼女に「デューイ氏は彼女の任期が1年であると理解している」と言ったが、彼女が校長職を「自ら進んで辞する」というような表現は一切使わなかったこと、またハーパー学長にデューイ夫人がどうして欲しいのかと尋ねたときも、答えは「その点についてはまだはっきりしていない」というものだったことをしっかり記録に残して欲しいと書いている[32]。デューイ夫人らしい非常に細かな点にこだわった指摘である。要するに3月27日のデューイ夫人とハーパー学長の直接の会見において、ハーパー学長は彼女にはっきりと辞職を求めておらず、ただ単に彼とデューイの間でデューイ夫人の校長職の任期は1年という確認がなされているとだけ通告したわけである。もともとこうした確認は、彼とデューイの間でなされたものではなく、彼とシカゴ学院のブレイン夫人との間でなされたものであったから、このハーパー学長のデューイ夫人宛の手紙の記述はデューイ夫人にとっても、またデューイ自身にとっても非常に心外なものであったろう。

これよりもしばらく後になってだが、デューイもまた、上記のハーパー学長からの手紙に対して「私の辞職についての貴殿の説明は私自身の辞職理由を正しく表わしていません」と反論している。そして、次のように論じている。

デューイ夫人を附属小学校の校長に再任しないという問題は私の辞職の原因ではまったくありません。それどころか、私どもの辞表が貴殿の手に渡るまでは、この問題が私どもの間で話し合われたことはまったくありません。彼女が校長であるという事実を利用して、貴殿が私の学部長としての仕事を混乱させ妨害した

31 William Rainey Harper to Alice Chipman Dewey, April 30, 1904, ICU, Board of Trustees, Correspondence of the Secretary, 1890-1913, 3/7.

32 Alice Chipman Dewey to William Rainey Harper, May ?, ICarbS, JDP 4/5.

33 John Dewey to William Rainey Harper, May 10, 1904, ICU, Presidents' Papers, 1889-1925, 30/26.

ことは、数年にわたる経緯の中のほんの一事件でしかありません[33]。

デューイは、デューイ夫人が1903-04年度限りで附属小学校長を解任されることが不満で辞職するのではないと述べている。だから、逆にハーパー学長が譲歩して夫人の校長職の継続を認めても、それだけでは辞職の意思を撤回するつもりはないと言っているわけである。デューイの辞職の原因は、むしろここ数年にわたって教育学部長の仕事が思い通りにおこなえなかったこと、そしてその最大の障害がほかならぬハーパー学長自身であったことをデューイはきっぱりと指摘しているのである。

辞職の真相または深層

それにしても、デューイが教育学部長ばかりでなく、シカゴ大学哲学科主任教授までも辞職することにしたのはどうしてなのか疑問が残る。つまり、シカゴ大学そのものから完全に身を引くことを決めたのはなぜなのか。デューイの娘ジェーンやマックス・イーストマン、さらには一次資料を使ったマッコールの説明では、要するにさまざまな経緯の中で最終的に実験学校の存続が図れなくなったことがデューイ辞職の原因とされている。確かに、デューイが10年前シカゴ大学からの招聘に応じた一番大きな理由は、哲学科に教育学科が併設されていて、哲学を教育学と結びつけることができ、幼い子どもたちの教育を一つの実験場にして自らの哲学理論の構築を試みることができるという点にあった。だから、実験学校はデューイにとっては特別な存在であり、それが自らの手を離れて教育学部附属小学校として大学の公的管理下におかれてしまっては、もはや自分がシカゴ大学で哲学の研究を続けること自体に意味がないとデューイが判断したとしても不思議ではない。

だが、デューイがシカゴ大学に見切りをつけた理由はそれだけではなかった。デューイは、シカゴ大学教授を辞職することをハーパー学長に通知した4月11日以降、知人宛の手紙の中で辞職の意図をそれとなく伝えている。それを見ると、デューイがシカゴ大学そのものに見切りをつけた理由はもう少し複雑であったことがわかる。

デューイは、1904年4月12日付でコロンビア大学哲学科心理学教授のジェームズ・マッキン・キャッテル（James McKeen Cattell）宛に書いた手紙の中で「ここ2、3年ずっと考えてきたことをついに実行した――シカゴ大学を辞職した」と書いている。そして真っ先にキャッテルに知らせた理由として、「学外のだれよりも貴君にここ［シカゴ大学］の状況を忌憚なく語ってきたという事実」と、辞職後の再就職の見通しについて情報があれば知らせて欲しいことをあげている[34]。デューイは3月の上旬から下旬にかけてニューヨークに滞在し、コロンビア大学とブルックリン学院で集中講義をおこなった。おそらくその間に旧知の間柄であるキャッテルにシカゴ大学へ

34　John Dewey to James McKeen Catttell, April 12, 1904, DLC, Cattell Papers.

の不満を語っていたものと思われる。シカゴ大学を辞めることは「ここ2、3年ずっと考えてきたこと」とデューイは言っている。つまり、教育学部長に就任したあたりからデューイは辞職を考え始めていたということになる。しかも、デューイはコロンビア大学で集中講義をおこない、キャッテルをはじめとするコロンビア大学哲学科のスタッフと親交を深め、コロンビア大学にかなり興味をもちはじめていたようである[35]。キャッテルにそれとなく再就職の情報を求めているあたりも示唆的である。

1904年4月13、15日付でキャッテルはデューイに返事の手紙を出し、その中でデューイがシカゴを辞めたいと思っていることは前月デューイがニューヨークに来た時に聞いていたので、シカゴ大学を辞職したという知らせには別に驚かないし、同じような状況に置かれれば自分も当然辞職していると述べている。そして「資金も設備の提供もなしに教育ユートピアを作り上げるなんて出来るわけがない」と述べ、デューイのシカゴ大学への不満がやはり実験学校に対するハーパー学長と大学理事会の冷淡な態度にあったことを窺わせている[36]。少なくともそういう話をデューイはキャッテルにしていたのである。

キャッテルはこの手紙で、デューイがコロンビア大学に来て哲学の教授をするつもりがあるかどうか、あるならばバトラー学長に話をすると書いている。キャッテルからはさっそく誘いの返事が来たわけである

ところがデューイは1904年4月16日付のキャッテル宛の返事の手紙で、コロンビアに来ないかというキャッテルの誘いに、心からの感謝の意を伝えながらも、すぐには決心がつかないと即答を避けている。シカゴ大学を辞めたら6ヶ月ほどヨーロッパ旅行をする予定でいること、ここ2週間ほど緊張が続き、突然の申し出をゆっくり考えている余裕がないことなどを理由にあげている[37]。

同時に、この間、デューイの辞職届に対するハーパー学長の慰留の働きかけがおこなわれていた。ハーパー学長は、デューイ夫人の校長職を1年限りとする「了解」が昨年春にあったとする事実経過の説明をおこない、デューイの「誤解」をなんとか解こうと試みたが、結局、デューイ

35　ニューヨークからシカゴに戻ってすぐの1904年4月4日付ウッドブリッジ（コロンビア大学哲学科教授）宛ての手紙で、デューイは「キャッテル教授は次年度私に心理学の講義を依頼してきました。引き受けるつもりです。コロンビアでは素晴らしい経験をしました」と書いている。John Dewey to Frederick J. E. Woodbridge, April 4, 1904, NNC, *Journal of Philosophy* Papers. デューイの最初の辞表が出された翌日の1904年4月7日付で、ハーパー学長はデューイに、ニューヨークのブルックリンで公開講義をやるくらいなら、次年度シカゴのダウンタウンで6回か12回の公開講義をやるようにと依頼してきた。多分、まだデューイの辞表が手元に届いていなかったものと思われる。これに対してデューイは1904年4月11日付でハーパー学長に、この仕事を引き受けるかどうかは自分の辞職がどうなるか次第だと述べ、「ブルックリンでは3回の講義で200ドルですが、シカゴ大学の大学拡張部（Extension Department）は6回で100ドルしか支払わない」と書いている。シカゴ大学は待遇が悪いと言っているのである。William Rainey Harper to John Dewey, April 4, 1904, ICarbS, JDP 4/5; John Dewey to William Rainey Harper, April 11, 1904, ICU, Presidents' Papers, 1889-1925, 30/26.

36　James McKeen Cattell to John Dewey, April 13-15, 1904, DLC, Cattell Papers.

37　John Dewey to James McKeen Cattell, April 16, 1904, DLC, Cattell Papers.

を納得させることはできなかった。

コロンビア大学からの招聘

他方、コロンビア大学ではキャッテルがバトラー学長との間でデューイ招聘の話を進めていた。1904年4月19日付のキャッテル宛の手紙でバトラー学長は「もし彼［デューイ］が1905年7月1日に着任したいのであれば、私たちは完全に同意できると彼［デューイ］に約束してくれ」と書いている。そして、デューイ招聘のための資金を探すと書いている[38]。

デューイは、1904年4月21日付のキャッテル宛の手紙で、「辞職の緊張がなくなりつつあるので、将来を考えてみる余裕ができた」と書き、「貴君の2番目の手紙の後、次のように考えるようになった」として3つの選択肢を挙げている。①フリーになる。②管理職に就く。③哲学を教える。②の管理職については、イリノイ大学が学長を探していることを例にあげている。そして、③についてはコロンビア大学からの申し出が最も魅力的だとして、キャッテルに俸給や大学外での収入源、授業時数などについてさらに詳しい情報を求めている。さらに、ティーチャーズ・カレッジの附属スペイヤー・スクール（Speyer School）の校長職に空きがあるかどうか、そしてデューイ夫人に校長職の機会があるかどうかも尋ねている[39]。上記のようにデューイが「貴君の2番目の手紙の後」と言っているように、デューイのこの手紙に先立ちキャッテルからは多分、バトラー学長がデューイを招聘する意向でいることを伝える手紙が来て、デューイとしても具体的に今後の身の振り方を考え始めたということであろう。

それにしても、この手紙の最後でデューイは「私の今後は大部分、コロンビアでの哲学と、どこかの管理職（そのテクニックはここ数年学んだ）との間の選択にある」と書いている点は興味深い。デューイはシカゴを去ったあとヨーロッパ旅行に出かけ、しばらくフリーの時間をすごしたあと、どこかの大学で学長などの管理職をしたいという希望をもっていたようである。具体的にイリノイ大学が学長を探していることを例に挙げているが、管理職のテクニックは「ここ数年学んだ」と言っており、それはシカゴ大学で教育学部長をした経験のことを言っているので、デューイとしてはコロンビア大学で哲学を教えること以外に、この経験を生かしてどこかの大学で管理職を引き受けることも選択肢に入れていたということになる。しかし、シカゴでの教育学部長の経験は、デューイにとって必ずしも満足のいくものではなかったし、むしろシカゴ学院教員団との対立の中で教育学部長としての仕事がうまく進まなかったことがシカゴ大学からの辞職の背景にあったことを考えれば、デューイが哲学を教えること以外に、大学の管理職に就くことを選択肢に入れていたことは意外な感じを受ける。

ともかくも依然としてデューイはコロンビアからの誘いに、詳しい条件を聞いてからと即答を

38　Nicholas Murray Butler to James McKeen Cattell, April 19, 1904, DLC, Cattell Papers.

39　John Dewey to James McKeen Cattell, April 21, 1904, DLC, Cattell Papers.

避けている。

ところが、バトラー学長から1904年4月23日付で直接デューイに電報が送られ、「コロンビア大学哲学教授を引き受けないか？俸給5,000ドル、1904年9月または1905年9月着任」と知らせてきた[40]。これに対してデューイは即答を避け、俸給や授業負担、着任時期などについて細かな条件を尋ねる電報を翌日の4月24日か翌々日の4月25日にバトラー学長に送ったらしい[41]。

ウイリアム・ハリスとのやりとり

デューイとデューイ夫人が教育学部の役職の辞職届を出したのは4月上旬であった。その直後の1904年4月9日付で、デューイ夫人は連邦教育局長官のウイリアム・ハリス（William Torrey Harris）宛に手紙を出し、近くヨーロッパ旅行を計画しているので、各国の教育事情を視察できるよう便宜を図ってもらえないかと依頼している[42]。ハリスは連邦教育局長官になる前は、セントルイスで教育長を務め、またセントルイス・ヘーゲル哲学運動の中心人物として若きデューイが哲学研究の道に進む上で大きな影響を与えた人物である。どうやらハリスからは便宜を与えるとの返事があったようで、1904年4月21日付のハリス宛の手紙でデューイ夫人は「こんなに早く応諾いただけるのでしたら、最初の手紙でもっと詳しくお話すべきでした」と述べて、自分と夫のデューイが教育学部との関係を解消したことを告げている[43]。しかし、デューイがシカゴ大学教授職についても辞職届を出したことには触れていない。

コロンビア大学のバトラー学長から4月23日付で招聘の電報が届いた翌々日の1904年4月25日付で、デューイはハリス宛に手紙を書き、シカゴ大学教授の辞職届も出したことを知らせ、ハリスに今後の再就職先について「何か助言をくださるおつもりがあれば幸甚に存じます」と書いている。デューイ夫人に対するハリスの厚意を知って、自分もあえてハリスに頼みごとの手紙を書いたものと思われる[44]。

ハリス宛のこの手紙で、デューイはシカゴ大学を辞める決意をした事情について「事の要点は、学長のやりかたとはうまくやっていけないとわかったということです。ですから、私がどこか他所に移ることが彼にとっても私自身にとってもよいことと思ったのです」と書いている。ハーパー学長のもとでは仕事を続けられないということがシカゴ大学を去る理由に挙げられている[45]。そして「言うまでもなく、私は民主主義教育を支持しています——つまり、性別とかなんとかにこだわらない民主主義の教育です。しかし、現在の状況下でそのような民主主義が公正に示されて

---

40 Nicholas Murray Butler to John Dewey, April 23, 1904, NNC-Ar, Central Files Collection.

41 1904年4月25日付のバトラー学長からデューイ宛の手紙には、「私の土曜日［4月23日］の電報に対する貴殿の返事の電報が今朝届いた」と書かれている。Nicholas Murray Butler to John Dewey, April 25, 1904, NNC-Ar, Central Files Collection. ただし、デューイがバトラー学長に送った返事の電報は不明である。

42 Alice Chipman Dewey to William Torrey Harris, April 9, 1904, CLSU, Harris Papers.

43 Alice Chipman Dewey to William Torrey Harris, April 21, 1904, CLSU, Harris Papers.

44 John Dewey to William Torrey Harris, April 25, 1904, CLSU, Harris Papers.

いるようなところがどこかにあるでしょうか」と書いている[46]。間接的ながら、シカゴ大学のハーパー学長と理事会の大学運営が非民主的で、女性差別的だと言っているのである。もちろん、女性差別的というのは直接にはデューイ夫人の校長職の扱いのこと言っているのであろうが、非民主的というのはハーパー学長の大学運営を含めて、シカゴ大学そのものの体制についてデューイが着任当初から抱いていた疑問を指しているものと思われる[47]。

管理職ポストへの意欲

デューイがこの手紙でハリスに期待している「助言」は、あとで見るように、どこかの大学か研究機関で管理職のポストがあれば紹介してほしいということであったから[48]、デューイがここで言っている「民主主義教育」ないし「民主主義の教育」というのはそういう大学等の研究機関における管理運営上の「民主主義」のことを意味しており、彼は自ら管理職の仕事に就いてそれを実行したいと考えていたということになる。先に4月22日付のキャッテル宛の手紙で、管理職についてはシカゴでの教育学部長の経験を生すことができると言っていた意味もそれで理解できる。どうやらデューイは、ハーパー学長のもとで教育学部長という重職をこなしながら、大学等の研究機関における管理職の仕事に意欲をもつようになっていたようである。それは一言で言えば、高等教育機関の民主化の課題に取り組むことである。もちろん、そこにはハーパー学長および理事会の大学運営に対するデューイの個人的な不満があったことは確かであるが、それとともにシカゴ大学という新生のリサーチ・ユニバーシティに10年籍をおく中で、大学という研究教育機関の組織運営のあり方と高等教育の理念に関わるデューイなりの考え方が芽生え、自ら管理職の仕事に携わってみたいという希望が生まれてきたものと思われる。後にデューイは、実際に管理職に就くことはなかったけれども、コロンビア大学教授としてアカデミック・フリーダムの問題に積極的に発言をおこなうようになり、大学等の高等教育機関の内部に巣食う差別や抑圧の問題にも直接行動を起こすようになる[49]。

それにしても、デューイはコロンビア大学のバトラー学長から招聘の電報を受け取っても、なおコロンビアで哲学を教えることに意を決せず、どこかの大学で管理職のポストに就くことも考

45　デューイは、カリフォルニア盲学校のウィルキンソンに宛てた手紙でも、「私は辞職しました。ハーパー氏と私は一緒にうまくやっていけないと思ったからです。そして、困難はなくなるどころかますます大きくなるように思われたのです。相互理解が十分に得られない大学で働く考えはないので、辞職したほうがいいと考えました」と書いている。John Dewey to Warring Wilkinson, April 28, 1904, CU-BANC, Wilkinson Papers (BANC MSS C-B 815).

46　John Dewey to William Torrey Harris, April 25, 1904.

47　小柳正司「シカゴ大学時代のジョン・デューイの書簡について（1）―実験学校設立に至るまでの経過―」『鹿児島大学教養学部研究紀要』第52巻、2001年3月、176頁、参照。

48　John Dewey to William Torrey Harris, April 28, 1904, CLSU, Harris Papers.

49　デューイとアカデミック・フリーダムとの関わりについては次を参照。George Dykhuizen, *Life and Mind of John Dewey* (Carbordale, IL.: Southen Illinois University Press, 1973), pp.161, 167-169, 274-275.

えていたことになる。ハリス宛の手紙と同じ1904年4月25日付でデューイはキャッテル宛に手紙を書き、バトラー学長が提示した年報5,000ドルについて「考えれば考えるほど重要になってきた」と述べ、「教授職以外に永続的な収入源の保障があるだろうか。また、外部の仕事のことを考慮して授業時間数で配慮してもらえるだろうか」と尋ねている。そして、コロンビア大学からの招聘について「双方の学長の間で話し合いがあったかどうか知らないか？あるいは貴君がそう推測できるような何か根拠のようなものがあれば知らせて欲しい。ただの好奇心で尋ねているのではない」とも書いている[50]。辞表がまだハーパー学長の手元に保留されたままになっているこの時点で、デューイはバトラー学長が提示した年報5,000ドルの条件でコロンビア大学からの招聘を受け入れるかどうか、かなり神経質になっていることがうかがえる。

同じく1904年4月25日付でバトラー学長はデューイ宛に長文の手紙を出し、この間デューイがキャッテルを通して、あるいは電報で直接バトラー学長に問い合わせてきた事項について詳細な説明をおこなっている。年報は5,000ドル以上には増やせないこと、副収入も希望次第である程度は見込めること、授業負担は「あなた次第」であること、着任は1904年9月でも1905年2月でも1905年9月でも希望どおりにできること、ティーチャーズ・カレッジでも教授陣（ファカルティ）の一員としての籍が与えられること、デューイ夫人が望むなら附属スペイヤー・スクールで仕事をする機会はあることなどが記されている。そして、5月2日に理事会があり、その前の4月28日の教育委員会に諮りたいので、承諾の返事をその日の午前までに電報でもらえるとありがたいと書いている[51]。

翌日の1904年4月26日付でキャッテルはデューイに手紙を書き、管理職の仕事ではなくコロンビアに来て哲学の研究を続けるべきだと進言している[52]。ちなみに、この4月26日にシカゴ大学ではハーパー学長がデューイと会見をもち、デューイ夫人の校長職の継続を認めてもよいと最後の慰留をおこなっていた。そして、デューイは1904年4月27日付でハーパー学長に会見の申し入れをおこなっている。デューイとしてはハーパー学長の立場を最終確認する会見となったであろう。

招聘受諾

デューイは1904年4月28日にコロンビア大学のバトラー学長に、以下のような招聘受諾の電報を打った。

2月着任。次年度以降の授業時数は個人的に相談するまで未定としたい。月曜日の会議後に公にしてくだ

50　John Dewey to James McKeen Cattell, April 25, 1904, DLC, Cattell Papers.

51　Nicholas Murray Butler to John Dewey, April 25, 1904, NNC-Ar, Central Files Collection.

52　James McKeen Cattell to John Dewey, April 26, 1904, DLC, Cattell Papers.

53　この電報については、1904年4月28日付のキャッテル宛の手紙でデューイが「今日午前バトラーに電報を打った」と述べて、電報の全文を知らせている。John Dewey to James McKeen Cattell, April 28, 1904, DLC, Cattell Papers.

さい[53]。

「2月着任」とは、1905年2月に着任するということである。デューイは1903-04年度終了までシカゴにいて、その後半年間家族とともにヨーロッパ旅行に出かけ、それからニューヨークに移るつもりであったことがわかる。「月曜日の会議」とは、先にバトラー学長が1904年4月25日付の手紙で知らせてきた5月2日開催予定の理事会のことである。理事会で正式に採用が決定されれば、その後にそのことを公表してください（つまり、それまでは公表を差し控えてください）とデューイはバトラー学長に伝えている。そして、次年度以降の授業時数、つまり1905-06年度からの授業時数については未定にして欲しいと記している。この授業時数のことについて、デューイは1904年4月28日付のキャッテル宛の手紙で次のように書いている。

> 授業時数に関しては、貴君の2通の手紙で、現在の提示条件を受け入れても、私が後々管理職の仕事をやりたいと思ったときに私を縛るものではないと知らせてきたことにもとづいたものです[54]。

デューイは、コロンビア大学からの招聘を受諾しながらも、なお将来に管理職の仕事に就く希望を捨てていないことがわかる。コロンビア大学に移っても、哲学の研究と学生教育だけに専念するつもりはなく、何らかの管理職、例えばティーチャーズ・カレッジのディーンなどの仕事に意欲をもっていたのである。こう言われたキャッテルの方はどのような思いであったろうか。先に1904年4月26日付の手紙でキャッテルは、デューイには管理職の仕事よりも哲学研究に専念する方が望ましいと、次のように書いていた。

> 貴君とジェームズ［ウイリアム・ジェームズ］は哲学の偉大な二人の人物であると思われる。哲学の才能はまれなもので、管理職の仕事よりも世界にとってはるかに価値がある。貴君は貴君自身を公共事業に携わるトラストのようなものだと見なすべきでしょう。哲学研究の機会と自由はほかのどこよりもここ［コロンビア大学］が望ましいと私は心底からおもっています[55]。

キャッテルにしてみれば、デューイをコロンビア大学に招聘したのは、彼がハーバード大学のウイリアム・ジェームズと並ぶアメリカ哲学界の巨星であると考えたからであって、これによりコロンビア大学に最強の哲学科をつくることができると考えたからである。ところが、デューイの方は哲学研究を発展させたり、優秀な哲学研究者を育てたりすることよりも、大学の管理職の仕事に意欲を示している。「貴君は貴君自身を公共事業に携わるトラストのようなものだと見な

54　John Dewey to James McKeen Cattell, April 28, 1904, DLC, Cattell Papers.
55　James McKeen Cattell to John Dewey, April 26, 1904, DLC, Cattell Papers.

すべきでしょう」というキャッテルの言葉には、もう少し自分を客観的に見たらどうかという彼のデューイに対する思いが読み取れる。

デューイはバトラー学長に招聘受諾の電報を打った同じ1904年4月28日付でウイリアム・ハリスに手紙を出し、コロンビア大学哲学教授の職を受け入れたことを知らせている。そして、「私は今でも管理職の仕事よりも哲学研究にずっと専念しようと思っているわけではありません。またいつか、貴兄に助言をお願いするかもしれません」と書いている[56]。コロンビア大学哲学教授の職を受け入れても、デューイはまだ管理職の仕事への思いを完全には捨てていないことをハリスに伝えている。

ハリスは1904年4月30日付でデューイに返事の手紙を送り、デューイとコロンビア大学は最良のコンビネーションになるだろうと書いてきた。そして、デューイが管理職の仕事を望んでいることにも賛意を示し、いつでも相談に応じると書いている[57]。

他方、コロンビア大学のバトラー学長はデューイから招聘受諾の電報を受け取った翌日の1904年4月29日付でシカゴ大学のハーパー学長宛に一連の経過を知らせる手紙を出している。そして、5月2日の理事会でデューイ採用の決定がなされればただちに公表する予定でいるが、その前に「貴殿に個人的にお知らせしておきたい。5月14日に具体的な手続きに入る前にご返事をいただきたい」と書いている[58]。ちなみに、5月14日にはシカゴ大学で教育学部の新校舎ブレイン・ホールの落成式がおこなわれることになっており、バトラー学長はハーパー学長からの依頼に応えて落成式で基調講演をおこなうことになっていた。

ハーパー学長は、1904年4月30日付のデューイ宛の手紙で、次回の理事会にデューイの辞職を提案すると伝えた。そして、1904年5月5日付でバトラー学長に5月14日のブレイン・ホール落成式でのスケジュールを知らせる手紙を書き、その中で1904年4月29日付の手紙でバトラー学長がデューイの招聘について知らせてきたことに謝意を述べ、「私たちを非常に困難な状況から救ってくれたことにも感謝します。詳しい話はいずれしたいと思います」と書いている[59]。ここで「私たち」と言っているのがシカゴ大学のことを指すのか、それともハーパー学長とデューイのことを指すのか不明であるが、いずれにしてもハーパー学長は、コロンビア大学がデューイを哲学教授に採用する予定であることを1904年4月29日付のバトラー学長からの手紙で知り、それによって次回理事会にデューイの辞職を提案することを決意したものと思われる。

デューイは、1904年5月2日付のキャッテル宛の手紙で、ハーパー学長がデューイに辞職を思いとどまらせるために、デューイ本人にではなくデューイの周辺の人たちに対して内々にさまざまな条件（オファー）提示や譲歩を示唆していたことを知らせている。そして、以前1904年4月25日付の手紙でキャッテルに、双方の学長間で自分の招聘の話がなされているかどうか尋ねたのは、ハー

56　John Dewey to William Torrey Harris, April 28, 1904, CLSU, Harris Papers.

57　William Torrey Harris to John Dewey, April 30, 1904, CLSU, Harris Papers.

58　Nicholas Murray Butler to William Rainey Harper, ICU, Presidents' Papers, 1889-1925, 13/2.

59　William Rainey Harper to Nicholas Murray Butler, May 5, 1904, NNC, Butler Papers.

パー学長が招聘の話を知れば直接自分に対して慰留工作をしてくるだろうから、事前にそれを避けるためであったと書いている。もちろん、デューイはハーパー学長がどのような条件提示や譲歩を示してこようと、辞表を撤回するつもりはなかったのであるが、同時に、ハーパー学長が水面下ではなくフェアな形で条件提示や譲歩を示してくれることには関心があったとも書いている[60]。ここにもハーパー学長の手法に対するデューイの嫌悪感が読み取れるが、その一方で、もしハーパー学長が最初からフェアな形でデューイとの話し合いに応じていれば、ハーパー学長の条件提示や譲歩の申し出に耳を傾けてもよかったというデューイの思いも感じ取れる。

辞職と採用の正式決定

コロンビア大学のバトラー学長は、1904年5月2日付けのデューイ宛の手紙で、この日コロンビア大学理事会がデューイの採用を認めたことを知らせた。年報5,000ドル、1905年2月1日着任、授業時数その他仕事上の詳細は哲学･心理学科主任のキャッテルと相談して決める、となっていた[61]。同日、シカゴ大学理事会もデューイとデューイ夫人の辞職を認める決定をおこない、シカゴ学院理事会に対し後任の教育学部長を指名するよう通知することとした[62]。デューイは翌日付でコロンビア大学哲学科のウッドブリッジ（Fredrick J. E. Woodbridge）宛にさっそく哲学の授業案を書き送っている[63]。そして、1904年5月9日付でバトラー学長宛に、5月2日のコロンビア大学理事会の採用決定を正式に受け入れるとの返事の手紙を出している[64]。これに対してバトラー学長からは1904年5月11日付で、次回6月6日の理事会で形式上の最終決定がなされることになっていると知らせてきた[65]。そして、1904年6月7日付の手紙でバトラー学長は、前日の理事会で公式の採用決定がなされたことを知らせてきた。デューイは、Faculty of Columbia College（学士課程）とFaculty of Philosophy（大学院課程）とFaculty of Teachers Collegeの三つのファカルティに属することになった[66]。これに対してデューイは、1904年6月14日付でバトラー学長に、この三つのファカルティで教えることを受諾すると返信している[67]。

60　John Dewey to James McKeen Cattell, May 2, 1904, DLC, Cattell Papers.

61　Nicholas Murray Butler to John Dewey, May 2, 1904, NNC-Ar, Central Files Collection.

62　The University of Chicago Board of Trustees, Minutes, vol. 4, 1902-1904, ICU, p. 449.

63　John Dewey to Fredrick J. E. Woodbridge, May 3, 1904, NNC, Journal of Philosophy Papers.

64　John Dewey to Nicholas Murray Butler, May 9, 1904, NNC-Ar, Central Files Collection.

65　Nicholas Murray Butler to John Dewey, May 11, 1904, NNC-Ar, Central Files Collection.

66　Nicholas Murray Butler to John Dewey, June 7, 1904, NNC-Ar, Central Files Collection.

67　John Dewey to Nicholas Murray Butler, June 14, 1904, NNC-Ar, Central Files Collection. ちなみに、デューイがティーチャーズ・カレッジでも教鞭をとることになったのは、ティーチャーズ・カレッジのディーンであるジェームズ・ラッセル（James Earl Russell）の依頼による。以下の書簡のやりとりを参照。James Earl Russell to John Dewey, May 31, 1904, NNC-T, Russell Papers, Folder 48; John Dewey to James Earl Russell, June 1, 1904, NNC-T, Russell Papers, Folder 48; James Earl Russell to John Dewey, June 1, 1904, NNC-T, Russell Papers, Folder 48; John Dewey to James McKeen Cattell, June 4, 1904, DLC, Cattell Papers.

デューイ辞職後のシカゴ大学教育学部

1904年5月2日にシカゴ大学理事会はデューイの辞職を承認するとともに、シカゴ学院理事会に対して後任の学部長の指名を求めた。これを受けて、シカゴ学院理事会は5月4日に会議を開き、前日にハーパー学長が示した案に沿ってデューイ辞職後の管理運営体制について協議した。学長の案は、教育学部を4人の主事（ディーン）によって運営するというものであり、学部長（ディレクター）は1年間空席とし、学長自らが教育学部を監督するというものであった。4人の主事とは、附属小学校主事のジャックマン、教員養成部（カレッジ）主事のロック、附属ハイスクール主事のオーウェン、シカゴ手工学校主事のベルフィールドである。この案に対して、教員養成部のベイバー嬢とライス嬢がロックの教員養成部主事への就任に疑義を唱えた。理由は、ロックは教員養成の仕事に経験がなく、教員養成部の教員団（ファカルティ）および学生を代表する地位にはふさわしくないということであった。その結果、彼女らと学長の間でこれらの疑義について話し合い、シカゴ学院理事会に報告することとなった[68]。

その後の経過は不明であるが、1904年5月17日のシカゴ大学理事会で教育学部の今後の体制に関連して、教員養成部（カレッジ）のディーンであったジャックマンをデューイ夫人の後任の附属小学校長にするという勧告がなされた[69]。実際に1904-05年度の職員名簿を見ると、附属小学校長にはジャックマンが、教員養成部のディーンにはジョージ・ロックが就いている[70]。ちなみに、教育学部長（ディレクター）は1909年にジャッド（Charles Hubbard Judd）が就任するまで空席のままとなった[71]。

他方、デューイとデューイ夫人の辞職により、かつての実験学校の教師たちも辞職することになった。デューイは、1904年4月29日付のフランク・マニー宛の手紙で、「私たちが去ることで、考えていた以上に教師たちの間に不和を生じさせていることがわかった」と書いている。そして、織物・デザイン教師のハーマー嬢（Althea Harmer）は辞職したこと、第7学年担当で理科教師のギレット氏（Harry Orrin Gillett）とドイツ語教師のシャーツ嬢（Anna Talea Scherz）もどこかに望みの場所が見つかれば去るだろうと述べ、二人についてそれぞれの教師としての優秀さをアピールしている[72]。おそらくはマニーに彼らの再就職の斡旋を依頼してのことであろう。実際、シャーツ嬢はマニーが総監（superintendent）を務めるニューヨークの倫理文化学校（Ethical Culture School）の初等科ドイツ語教師に応募している[73]。そして、デューイは1904年5月9日

68 Chicago Institute Minutes, May 4, 1904,WHi, Anita McCormick Blain Papers (McC Mss, Box 141).

69 The University of Chicago Board of Trustees, Minutes, vol. 4, 1902-1904, p. 461.

70 *Annual Register, The University of Chicago, July 1903-July 1904* (Chicago: The University of Chicago Press, 1904), pp. 130-132.

71 Nellie Lucy Griffiths, "A History of the Organization of the Laboratory School of the University of Chicago," M.A. dissertation, The University of Chicago, 1927, p. 114. 次も参照、Ida B. DePencier, *The History of the Laboratory Schools, The University of Chicago, 1896-1965* (Chicago: Quadrangle Books, 1967), p. 53.

72 John Dewey to Frank A. Manny, April 29, 1904, MiU-H, Manny Papers.

73 Anna T. Scherz to Frank A. Manny, May 5?, 1904, ICarbS, JDP 4/3.

付のマニー宛の手紙で、シャーツ嬢は助手職であることを知らないで応募したので実際にそちらに行くかどうかわからないこと、そしてギレットにもその気があるならマニーに相談するように言ってあると書いている[74]。

結局、実験学校から附属小学校に移ってきた4人の教師はそのまま留まった[75]。

シカゴからの別れ

デューイは1904年6月27日にシカゴを去っている。彼は6月28日から7月6日までテネシー州ノックスビル（Knoxville）のサマースクールで教え、その後、7月9日にカナダのモントリオールから船で家族とともにヨーロッパ旅行に出発した[76]。妻アリスと子どもたちは6月28日にシカゴを発って、ニューヨーク州のアディロンダック山系にある山小屋に行き、それから7月9日にモントリオールでデューイと合流することになっていた[77]。

1904年6月10日にはデューイの送別会が催されている。招待を受けたシアトルのワシントン大学長フランク・グレイヴス（Frank P. Graves）は、欠席を知らせる手紙の中でデューイとデューイ夫人がシカゴを去ることを惜しんで次のように書いている。

> 私は出席できないことを非常に残念に思うとともに、デューイ氏が招聘を受けたことで私たちがいかに大きな損失を被ることになると感じているか、この短い書簡で表明したい。私自身はコロンビアの人間であり、デューイ夫妻が温かい歓迎を受けることはわかっているが、ここにこうして無念さを抑えきれずに参集する教え子たちほどに忠実で献身的で感謝の念をもった学生をあちらで見つけることはできないだろうと思う。
>
> 私たちの中にはデューイ夫人のもとで学んだ者もいるので、ニューヨーク行きは二重の損失だ。私自身、デューイ夫人にはたいへんお世話になり、将来完全な知的革命がもたらされるものと思っているだけに、彼女がまさに実例となって私たちが彼女のクラスで教えられた自制心と公正な判断力と子どもの権利に対する知的理解について、私はどれほど彼女に負うていることかほとんど言葉に尽くせない[78]。

やや大げさな表現ながら、一人の教育者としてデューイ夫人の存在が決して小さなものでなかったことが知れる。

6月12日にはジェーン・アダムズ（Jane Addams）がハルハウスでデューイ夫妻を送る夕食会

74　John Dewey to Frank A. Manny, May 9, 1904, MiU-H, Manny Papers. だが、結局ギレットは附属小学校に残った。彼は1909年から1944年まで校長を務めている。Ida B. DePencier, op. cit., pp. 53, 61, 参照。

75　Ida B. DePencier, *op. cit.*, p. 53, では6人となっているが、職員名簿で確認する限りでは旧実験学校の教員で1904-05年度に附属小学校の教員に残ったのは、ギレットとシャーツのほかに、音楽教師のカーン（Mary Root Kern）と助教師のエリザベス・ポート（Elizabeth V. Port）の4人である。*Annual Register, The University of Chicago, July 1903-July 1904* (Chicago: The University of Chicago Press, 1904), p. 132.

76　John Dewey to James McKeen Cattell, June 26, 1904, DLC, Cattell Papers. この手紙はシカゴで書かれている。

77　John Dewey to James McKeen Cattell, June 28, 1904, DLC, Cattell Papers.

78　Frank P. Graves to Carr et. Al. (Banquet Committee), June 6, 1904, ICarbS, JDP 4/5.

を催している[79]。

ブレイン夫人との別れ

デューイは6月7日にシカゴ学院のブレイン夫人に別れの挨拶に出向いている[80]。これはブレイン夫人からの希望にデューイが応えたものである[81]。

それ以前、5月の段階ではブレイン夫人とデューイの間でちょっとした行き違いがあったらしい。1904年5月11日付ブレイン夫人宛の手紙でデューイは次のように書いている。

> 貴女がメモで触れておられる貴女が教育学部をご訪問なさらなかったことについての噂話を、私はまったく聞いておりません。私はそのようなことを考えたこともありません。何か文書のようなものが出回っているようですが、ごく一部の人たちの間に限られ、私のところまでは来なかったのは幸いと言うほかありません。……（中略）……昨日の貴女のご訪問を知らせていただけなかったことは残念です。貴女をご案内できるものと思っておりました[82]。

デューイとブレイン夫人との関係がけっして良好なものではなかったことがうかがわれる。ブレイン夫人は、自らの寄付金で建設された教育学部の新校舎ブレイン・ホールが1903年10月に完成した後、新校舎への訪問を求めるデューイの要請になかなか応えようとしなかった[83]。おそらくは、シカゴ学院の附属小学校とデューイの実験学校の統合をめぐるデューイとシカゴ学院教員団との対立、とりわけ統合後の附属小学校長にデューイ夫人が就任したことをめぐる両者の不和が、ブレイン夫人を教育学部訪問から遠ざけることになったものと思われる。上記のデューイの手紙にあるように、ブレイン夫人が教育学部を訪問しないことについて一部に「噂話」があり、内容はまったく不明であるが、そのことについてブレイン夫人が直接デューイに事の真偽を問いただしてきたようである。そして、ブレイン夫人は学部長のデューイに知らせることなく教育学部を訪問し、そのことをデューイは遺憾に思っているとブレイン夫人に伝えている。

---

79 Jane Addams to James Tufts, June 3, 1904, MA, Tufts Papers.

80 John Dewey to Anita McCormick Blaine, June 16, 1904, WHi, Blaine Papers.

81 John Dewey to Anita McCormick Blaine, June 11, 1904, WHi, Blaine Papers.

82 John Dewey to Anita McCormick Blaine, May 12, 1904, WHi, Blaine Papers.

83 デューイは、1903年10月4日付のブレイン夫人宛の手紙で、ブレイン・ホールに入居したことを知らせ、「早急に来ていただき、教育学部と新校舎をご覧いただきたい」と書いている。John Dewey to Anita McCormick Blaine, October 4, 1903, WHi, Blaine Papers. また、1904年2月24日付のブレイン夫人宛の手紙でも、5月11日予定のブレイン・ホール落成記念式典でのスピーチを依頼するとともに、ブレイン夫人に教育学部訪問を求めている。John Dewey to Anita McCormick Blaine, February 24, 1904, WHi, Blaine Papers.